# ベンジャミン・フランクリンのエートスについての一考察

小　林　　基

## I　はじめに

マックス・ウェーバー（Max Weber, 1864–1920）は，かれの著名な論文『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の中で，資本主義の「精神」とよぶものに対する概念的な定義によってではなく，フランクリンに内在する「精神」[1] を具体的に「例示する」ことによってその論考の「主題」を展開する作業を始めている。ウェーバーが本論文の中で企図したものは，大塚久雄教授の「解説」の言葉をそのまま借用すれば，「カルヴィニズム・バプティズムその他の禁欲的プロテスタンティズム諸派の經濟倫理（＝エートス）と，近代西ヨーロッパにおける資本主義發展のいわば精神的推進力となった「資本主義の精神」の間に存する內面的關連を明らかにし，それによって，『無數の歷史的な個別的要因から生まれいで，獨自の「現世的」傾向をおびる近代文化の發展の織りなす網』の中で宗教的動機がどこまで歷史的原因として，いわばそうした一筋の「横絲」として働いてきたか，を追究しようとしたものである」[2]。この「解説」のことばの正当性については，何人も異議をさしはさむことはできないであろう。われわれはこの論考の中でウェーバーが築いた壯麗な「論理」の建造物とその完璧な「構造」を情熱的に説明してやまない大塚教授の「マックス・ヴェーバーにおける資本主義の『精神』」を軸とする諸論文[3] を主として参考にしながらベンジャミン・フランクリン（Benjamin Franklin, 1706–90）のエートスの性格をたずね，その特有の意味について考察したいと

思う。

## II　フランクリンにおける「営利心」の性格

ウェーバーは，さきに述べたように「資本主義の精神」をものがたるところの典型的な資料としてベンジャミン・フランクリンの有名な短文，「若き職人への忠告」(“Advice to a Young Tradesman,” 1748) とひきつづいて「富まんと欲するものにとっての必要な心得」(“Necessary Hints to those that world be rich”, 1736) から一部をとりあげて問題の説明に入っている。それをそのままここに引用することにする。

「時は貨幣であるということを忘れてはいけない。一日の勞働で10シリングをもうけられる者が，散歩のためだとか，室内で懶惰にすごすために半日を費すとすれば，たとい娯樂のためには六ペンスしか支拂わなかったとしても，それだけを勘定に入れるべきではなく，そのほかにもなお五シリングの貨幣を支出，というよりは，抛棄したのだということを考えねばならない。

信用は貨幣であることを忘れてはいけない。ある一人の人が，支拂期日の過ぎてからもその貨幣を私の手もとに殘しておく場合には，私はその貨幣の利息を，或いはその貨幣でその期間中にできるものを彼から與えられたことになる。もし信用が善且つ大で充分に利用されるとすれば，それが少なからぬ額に達することは明らかである。

貨幣は生來繁殖力と結實力とをもつものであることを忘れてはいけない。貨幣は貨幣を生むことができ，またその生まれた貨幣は一層多くの貨幣を生むことができ，さらに次々に同じことがおこなわれる。五シリングを運用すれば六シリングとなり，さらにそれを運用すれば七シリング三ペンスとなり，そのようにして遂に100ポンドともなる。貨幣の量が多ければ多いほど，その運用から生まれる貨幣は多く，利益の増大もますます速かになってくる。一頭の親豚を殺すものは，それから生まれる一千頭もの豚を殺しつくすもの

だ。五シリングの貨幣を死滅させるものは，それによって生みえたはずの一切のもの——幾百千ポンドの貨幣を殺害し（！）つくすものだ。

支拂のよい者は萬人の財布の主人である——という諺がある——ことを忘れてはいけない。約束の時期に正確に支拂うことが評判になっている者は，友人がさしあたって必要としていない貨幣をすべて何時でも借りることができる。

これは往々大きな利益となる。勤勉と質素とを別にすれば，すべての仕事で時間の正確と公平を守ることほど，青年が世の中で成功するために必要なものはない。それゆえ，借りた貨幣の支拂いは約束の時間より一刻も遲れないようにしたまえ。友人が怒ってそれ以後一切君の前では財布を閉じることのないように。

信用に影響を及ぼすなら，どんなに些細な行いにも注意しなければいけない。午前五時か夜の八時に君の槌の音が債權者の耳に聞えるならば，彼はあと六ヶ月構わないでおくだろう。それどころか，勞働していなければならぬ時刻に君を玉突場で見かけたり，料理屋で君の聲を聞いたりすると，彼は翌朝になれば君に返却せよと，準備もできぬうちにその貨幣を請求してくるだろう。

そればかりか，そのようなことは，君が債務を忘れていない印となり，君が注意深いとともに正直な男であると人に見させ，それで君の信用は增すだろう。

君の手もとにあるものがすべて君の財產だと考えて，そんなやりかたで生活しないように注意せねばならぬ。信用をえている人々が多くこの迷いに陷る。それを避けるために，支出と收入について詳細な記帳を行うがよい。君が骨折って小さなことにまで注意するようになるなら，こういうよい結果が生ずるだろう。どんなに小さい支出でも積み重なれば巨額となることにきづき，また何を節約できたか，將來は何を節約できるかがわかるようになる。

……

君の周到と正直が人々の評判になっているとすれば，君は年に六ポンドの貨幣で100ポンドを使わせてもらうことができるのだ。毎日10ペンスを無駄に支出するものは一年では六ポンドを無駄に支出することになり，ちょうど100ポンドを使わせてもらうための代價にあたる。自分の時間のうち，毎日10ペンスの價値に相當するだけの時間（それはおそらく數分に過ぎぬだろう）を無駄にするものは一年にすれば100ポンドも使える特權を無駄にしたことになる。五シリングの價値に相當する時間を無駄使いするものは五シリングを失うのであり，五シリングを海に投げすてるのと少しも違わない。五シリングを失うものは，その五シリングだけではなく，商賣にまわして儲けることができたはずの金額も全部失ってしまったことになる。——そうした額は，青年がかなりの年配に達するまでには，きわめて大きいものになるだろう。」[4]

以上の文章は，フェルディナント・キュルンベルガー（Ferdinand Kürnberger）が『アメリカ文化の姿』（Der Amerikamüde, Frankfurt, 1855）の中で，ヤンキー主義のいわゆる信仰告白として皮肉な調子で揶揄している文章そのものであるとウェーバーは説明している。[5] ウェーバーはキュルンベルガーが用いた言葉を巧みに利用して次のように言う。

「われわれに説教しているのはベンジャミン・フランクリンなのである。彼の口から特徴のある言葉で語られているものが「資本主義の精神」であるということは，この「資本主義の精神」という語の一般用語例にみられる一切の意味がそこに含まれているとは必ずしも云いえないにしても，やはり誰人もそれに疑いを挾まないであろう。われわれはもう少しこの文章について觀察してみることとしよう。われわれがこの「吝嗇の哲學」に接してその顯著な特徴として感ずるものは，信用のできる正直な人という理想であり，わけても，自分の資本を增加させることを自己目的と考えることが各人の

義務であるとの思想である。實際この説教の内容をなすものは單純に處世の技術ではなく，獨自な「倫理」であって，これを犯すものは愚鈍であるに止まらず，一種の義務忘却を犯すものとされているのである。このことは何にもまして事柄の本質をなしている。そこでは，「事業の才智」が教えられているだけではない。——そうしたものだけなら他にも勿論しばしば見出される。——そこには一つのエートスが表明されているのであって，このエートスという性格こそがわれわれの關心をよびおこすのである。」[6]（傍点および括弧は原文）と。

ウェーバーはここで「商人的冒険心」という言葉で表現されるようなせいぜいのところ道徳に無関心な気質を表わす自己目的的な貨幣追求欲または営利欲と特殊な倫理的な性格を有する営利心，あるいは，営利の倫理を範疇的に区別している。前者は「近代以前の『賤民資本主義』Paria-Kapitalismus であり，「中国・インド・バビロンにも古代にも中世にも存在していたかの『人類の歴史とともに古い』貨殖の業をまたそうした資本家の營み」[7] を通して実現される「欲望」であるが，後者は，禁欲的プロテスタンティズムのエートスの内部にあってフランクリンの場合におけるように「倫理的な色彩をもつ生活の原則という性格をとる」[8] ことによって「合理的な資本使用と勞働組織の近代的合理化とをして經濟行爲の方向を決する支配力」とする産業資本主義を促進と展開する方向に決定的な影響を与えた心的態度であるというのである。

実際フランクリンにとっては既にみてきたように利潤追求の営みは単に唯物主義的な生活の充足をもって個人の幸福や利益とする享楽主義者や欲深かな金儲け主義者の生活の手段のことではなく，近代の西欧文明がつくりあげた特有の性格をもつエートスと絡み合って積極的な倫理的価値が与えられていることがわかるのである。この点すなわち利潤追求の営みに対する倫理的評価の問題についてフランクリンの著作によって更に検討を加えてみることにする。

## Ⅲ　職人のエートス—「営利」と「倫理」の緊張関係

「営利」を端的に言えば倫理的義務として追求するという精神的態度は，さきに引用したフランクリンの「若き職人への忠告」(Advice to a Young Tradesman) の最後の章句にもうかがうことができる。「ヴェーバーはどういうわけか自分の引用文ではこの部分だけを省略している」[9] が，あるいはこの箇所の最後のセンテンスはベンジャミン・フランクリンのヤンキー的ユーモアを示すものであって，ウェーバーの主題の説明にとって「不純な非古典的な」[10] 資料となる恐れがあったからかもしれないが，それはともかく，まずその部分を引用することとしよう。

「要するに富に至る道はきみがその気になれば市場へ行く道と同じくらい明らかである。それは主として勤勉と倹約の二つの言葉にかかっている。すなわち，時と貨幣を浪費しないでこの二つのものを最善に活用することである。勤勉と倹約がなければ何事もだめであり，これがあれば，すべてはうまくゆくのである。正直にもうけられるものだけをもうけて，もうけたものすべてを節約する（必要な出費は別であるが）その人は必ず富むであろう。——世界を治め給い，正直な努力によって祝福を求めるものの願いを聞きたもう神が，深い摂理でこれと異なる予定をなしたまわない限りは。」[11]

この引用文は，繰返していうが「若き職人への忠告」の結びの句であって，フランクリンが説いている言葉は，いわゆる「処世術」でないとは言えないし，また功利主義が見られないわけではない。しかし彼の若い職人に対するすすめには，「紛れもなく倫理的熱情が見られるのであり，この点——これが問題なのである——こそが彼の特徴となっている。彼にとって貨幣への注意を欠くことは資本の幼芽を「殺す」ことであって，その故に倫理的罪悪なのである。」[12]

この「若き職人への忠告」を発表したフランクリンが，自らを‘an old tradesman’と称していることは注目しなければならないことである。当時フラ

ンクリンは，42歳の働き盛りで，フィラデルフィア市会議員であった。1728年自分の印刷所を開いてから20年を経ており，その間合理的な生活設計によって経済的に成功していたばかりか，5年前の1743年には大学設立案を起草するかと思えば，アメリカ学術協を設立するといった工合で，その活躍は実に目ざましかったのである。そのフランクリンが生涯，自らを‘tradesman’(職人)と認め，後輩の tradesman の前途に期待を寄せていたという事実を指摘したいのである。O. E. D. によれば，tradesman という言葉は，第一義的には熟練工，職人，技工等の手工業者のことであって，商品の販売や交易に従事する商人（merchant）や店主（shopkeeper）を意味するのは第二義的である。

更に植民地時代はいうまでもなく，独立当時のアメリカを支えていた経済的営みは農業であり，工業も商業も，「母胎である農業からまだ分離しきっていない胎児のような状態にあった」[13] のである。フランクリンは，当時の合衆国の姿を次のようにつたえている。

「この国では土地が低廉で，まだ住民のいない広大な森林地帯があり，近い将来に占有される恐れはまずない。従って森林のある100エーカーの肥沃な土地を8ギニーか10ギニーで手に入れることは辺境地帯の附近やその他多くの場所において可能であるため，若く元気で穀物の栽培や家畜の飼い方——それはヨーロッパと殆ど同じだ——を知っている労働者たちはわけなく身を立てることができる。他人に雇われて働く間にそこで得た高賃の一部を蓄わえて農場経営を始めることができる。それを近隣の人が助けてくれたり金を貸してくれたりする。イギリス，アイルランド，スコットランドそしてドイツからやってきた多くの貧民が，このようなやり方で数年もすれば富裕な農民になる。これらの人々は，かれらの母国では，土地という土地は残らず占有され，しかも低賃金であるから生まれた時の貧しいままの状態から決して脱け出ることはできなかったのである。」[14] 更にフランクリンの語るところによると，土地の耕作で安定した生計をたてられる上に自然の環境が健康

的であるから，農民の人口が急速に増加するのは当然の成り行きであり，なお新たな移住者が加わってその傾向はいっそう速められる。その結果，そうした土地の耕作者たちに家屋やヨーロッパの規準からすると粗末な家具や道具などを供給するようなおよそ必要で有用な種類の職人に対する需要が絶えないのである。[15]

アメリカの社会で有用な構成員として認められる人々は，したがって農夫であり，鍛冶屋，大工，旋盤工，鞣皮工，靴屋などのなにか一つの有用な「手の業」(art) をもつ職人 (mechanic) であり，勤労を欲しない上流人士(a Man of Quality) ではないのである。こうして18世紀におけるアメリカの社会は，農業の一般的繁栄の土台の上に，その生産性の高い自営農業とそこから生じる余剰生産物を購買力としてあらゆる種類の利潤の多い工業が成立する。労働者さえも世界のどこよりもはるかに高い賃金を得て，二，三年もすれば，自営者 (master) となって市民の尊敬をうけられるようになる，とフランクリンは，みているのである。

「アメリカ移住希望者のための知識」の中でフランクリンが説いているアメリカの支配的な経済的社会的現勢は，極くおおざっぱにいうと全般的に幸福な中産状態であって，道徳的にも勤労と不断の就業によって，怠惰のために起りがちな悪徳はいちじるしく阻止されている。いわば農民を主体とする勤労者の発展的な国土であった。

このようなフランクリンの見方には，フランクリンのアメリカの経済的社会的現勢に対する客観的認識だけでなく，彼の生活体験に根ざした勤労の「哲学」の影響がないとはいえないように思うのである。フランクリン自身は後年理神論者となり特定の宗派に属することはなかったが，長老派の家庭に育って両親からピューリタニズムの精神的感化をうけていたのである。彼は子供の頃，父の教訓の一つ「あなたはそのわざ (craft) に巧みな人を見るか，そのような人は王の前に立つが，卑しい人々の前には立たない。」(箴言，22：29) を心に

とめて，「勤勉」(Industry) と「倹約」(Frugality) こそ富に至る道と考えて励み，遂に印刷業者として成功するに至ったのである。

この手の業に励む職工人の生活原理は，彼の輝かしい経歴の前半だけでなく，生涯を支配する生の「哲学」となったのではなかろうか。そこには世界の創造者たる神を「働くもの」として捉えるプロテスタンティズムの「生」の論理がおのずから脈動しているのを感得することができるのである。フランクリンのエートスとは，まさに「倫理」と「営利」の緊張関係を実際の生活の場できびしく追求していく「職人」の生活に根ざしたエートスであると言えるように思うのである。そうした「倫理」と「営利」の緊張関係をフランクリンの『自伝』を中心にみてゆくこととする。

## Ⅳ 『自伝』について

### 1. 『自伝』の意味

フランクリン自身は『自伝』(Autobiography) という言葉を一度も使わずいつも『回想録』(memoirs) といっていたことは，ファランド (Max Farrand) も指摘している通りである。[16] 'autobiography' という言葉の最初の用例として O. E. D. はフランクリンが死んで約20年後の1809年，「クォータリー・レビュー」(*Quarterly Review*)に寄稿したロバート・サウジイ(Robert Southey, 1774-1843) の文章から This very amusing and unique specimen of *autobiography* (イタリックは筆者) をとりあげている。"autobiography" の意義は，The writing of one's own history; the story of one's life written by himself (自分自身の経歴を書いたもの；筆者自身の生涯の歴史又は物語) であるから，一般にはフランクリンの『自伝』には嘘いつわりのない彼の生涯の記録が書かれていると思われがちであるが，実際はそうではなく，大別しても回想録的な面と人生訓あるいは処世訓的な面との二つの面をもっているのである。そこには「事実」と「虚構」とが複雑にいりくんでいるのであ

るが，それだけにフランクリンの人間性を窺う格好の資料といえるように思われるのである。

## 2. 『自伝』の成立について

今迄のところもっとも信頼できるフランクリンの伝記として定評のあるカール・バン・ドーレン（Carl Van Doren, 1885-1950）の『ベンジャミン・フランクリン』(Benjamin Franklin, 1938）と『ベンジャミン・フランクリンの自伝的著作集』(Benjamin Franklin's Autobiographical Writings, 1945) に主としてもとづきながら『自伝』成立の過程を簡単に辿ってみることとする。

フランクリンが『自伝』の第一部を書き始めたのは，1771年彼の三度目の訪英の時で66歳であった。フランクリンは7月の末ハンプシャーの小さな村トワイフォード（Twyford）にあるセントアサフ（St. Asaph）の監督であった親友ジョナサン・シップレー牧師（Jonathan Shipley, 1714-88）の家庭の客となって二，三週間程過した。そこでフランクリンは公務を離れくつろいだ気持ちでシップレー家の若い人たち——息子一人と五人の娘がいた——に向って自分の少年時代の話をした。そのうち，おそらく一家の人にすすめられたからであろうが，フランクリンはこの機会に故郷の肉身のために若い頃の思い出を書いておこうと思いたったのであろう，わが子ウイリアムに語りかける形式で『自伝』を書き始めたのである。

息子のウイリアム（William Franklin, 1730-1813）は親の七光りとはいえ，30歳を少しでた年頃でニュージャージー州の知事になったほどの人物であるが，独立戦争に際しては知事の立場上，イギリス国王を支持する側にたち，父親と仲違いすることになる。したがって『自伝』の後半部はこの息子にあててフランクリン家の歴史を語るという私的記録の性格を離れて若いアメリカの人たちにあてた書簡の形をとることになるのである。第一部は今日行われている自伝のおよそ五分の二にあたり，1730年，24歳で結婚生活に入るところで中断され，

再び筆がとられたのは1784年であった。その間13年のブランクは，フランクリンがアメリカ独立戦争を経て，建国の偉業の達成に参加したもっとも多忙な一時期であった。

第二部は，パリの近郊パシー（Passy）に滞在中に国の内外の友人のすすめによって書きつがれた。それは「道徳的完成」(moral perfection）を目標とした人類の師表たるべき偉人の生涯を記録するという一種の公的使命を帯びていたのである。この部分は『自伝』全体の長さのおよそ八分の一を占める。

1788年81歳で病にかかり死を予感したフランクリンはフィラデルフィアの自宅で彼の『自伝』をとりあげた。この第三部は1757年彼が51歳までの期間を扱ったもので，この本の中で最も長く全体のおよそ半分を占め，事業家として政治家として学者として活躍した多彩な生活を扱っている。第四部は1789年から1790年フランクリンの死に至るまでの期間に書かれたが病気のためにほとんど筆がとれなくなり，完成を諦めてそれまでの原稿を孫のベイチ（Benjamin Franklin Bache, 1769–98）に清書させ，二通の写しを作らせた。多少の訂正を加えて出来上った写しの一通をフランスの友人ル・ヴェイヤール（Le Veillard）に，他の一通をクェーカー教徒のベンジャミン・ボーン（Benjamin Vaughan）に送った。フランクリンの死後，自伝を含む原稿や蔵書の大部分は孫のウイリアム・テンプル・フランクリン（William Temple Franklin, 1760–1823）に贈られたが，ウイリアムの編纂になる祖父の『自伝』の公刊は，フランクリンの死の翌年にでたフランス訳[17]にずっと遅れて1818年ロンドンで出版[18]された。これは英語版としてでた最初の重要なテクストであり，まだ完全なものではなく1757年フランクリンのロンドン到着で終っている。後に，ハーバード大学の史学教授であったスパークス（Jared Sparks, 1789–1866）がこれを補正して1836—40年にフランクリン全集十巻を出版した。[19] この中に収められているのがいわゆるスパークス本である。ところが1861年アメリカ領事としてパリに赴任し，1865年には全権公使にもなったビグロー（John Bigelow,

1817-1911) がフランクリンの肉筆原稿を探し出し，この原稿にもとづいて完全な『自伝』を編纂しようと企図して1887—88年に出版した。[20] その中に収録されているのがビグロー版である。更に1905—7年にスマイズ(Albert Henry Smyth) の十巻本の全集[21] がでており，これが今迄のところ決定版とされている。なお，「包括的であることを意図した」[22] 全四十巻から成るイエール版全集は1959年から継続して刊行中であり，その全集中の『自伝』は，1964年にでている。このイエール版は，ブルース・グレインジャー (Bruce Granger) によると，自筆の原稿の入念な写本であって，専門家以外のすべての人にとって最も満足すべき版である。が，専門家は現在でも「信頼できない混合物」(an untrustworthy hybrid) ともいうべきマックス・ファランドのテキスト[23] を参照するといっている。以上の他にもスパークス本か，ビグロー本かのいずれかを底本として数多くの『自伝』の異本が出版されており，[24] どの版本がもっとも信頼できるかを決定すること[25] は筆者の力の及ばないところであるから，以上簡単にテキストの紹介にとどめた次第である。

### 3. 『自伝』のエートス

フランクリンの場合，「倫理」の実践が「営利」を媒介しつつ遂行されるだけでなく，「営利」活動自体も「倫理」の実践を媒介しつつ遂行されるという形をとっていることは，「富まんと欲する者にとっての必要な心得」その他の陳述によって明らかである。[26] この「倫理」と「営利」の内的な関係をウェーバーによって歴史的コンテクストの中においてみると次のようになる。

「資本主義の精神」においては，「倫理」と「営利」が相互に媒介し合いながら，しかもその精神的根基はしだいに，「倫理」の実践が「営利」活動を媒介しつつ遂行されるという，すぐれて倫理的な事態から，「営利」活動が「倫理」の実践を媒介しつつ遂行されるという，いわば倒錯的な事態へと重心を移動させ，そこに独自な価値の倒錯が出現している，といってよい。こうし

て「プロテスタンティズムの倫理」のいわば倒錯の結果生誕した「営利自体を最高善とする倫理」――だから，宗教的観点からすれば，「プロテスタンティズムの倫理」とはおよそ異質なものである――これこそが「資本主義の精神」の精髄であり，すぐれてその個体的特質だとヴェーバーはいうのである。」[27]

それではフランクリンにおける「倫理」と「営利」または「利得」はどちらが優勢であろうか。「だれも，ふたりの主人に兼ね仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛し，あるいは，一方に親しんで他方をうとんじるからである。あなたがたは，神と富とに兼ね仕えることはできない」（マタイによる福音書，6：24）というこの有名な「山上の垂訓」の一節は17世紀のピューリタンたちのエートスにもっとも適合した「ことば」であったばかりでなく，およそ「倫理」と「営利」の関係について問われるとき，依然として真理性を失っていないのではなかろうか。そのことについて以下にフランクリンの『自伝』の内容にそくしてみてみることとする。

『自伝』を読んでわれわれがまず気付くことは，「徳」の世俗内的効用をフランクリンが力説していることである。

「この小著で私が説明し強調したいと思ったものは，人間の本性だけを考えてみても，『もろもろの悪行は禁じられているから有害なのではなく，有害だから禁じられている』のであり，従って来世の幸福を望む者はもとより，現世の幸福を望む者にとっても，徳を積むことは有利なのだ，という教えであった。また私は次のような事情から，つまり世には仕事を正直にやってくれるような人間を求めている裕福な商人，貴族，国家，あるいは諸侯などがいつもいるものだが，そんな正直者は甚だまれであるという事情から，正直と誠実とは，貧しい者が立身出世するのにもっとも役立つ徳であることを，若い人々に悟らせるようにしたいと思ったのである。」[28]

「徳」は徳自体に内在的な価値があるというのでなく，徳をつむことは生活

の手段として有利であり，徳をつんだ人は世間で役に立つ人間であるという実利主義的考えである。「正直にやってくれるような人間を求めている」という箇所にしても原文では "have need of honest instruments for management of their affairs"[29] となっており，こういう言葉づかいにもフランクリンの合理主義的発想がでているようである。つまり，ある目的や仕事を遂行する「代理人」や「手先」という意味で 'instruments' という言葉をあてることは勿論現代では普通であり，18世紀以前においてもチョーサーやシェイクスピアにもみられるところであるが，'honest' という形容詞とのストレートな結びつきが独創的で面白いのである。極言すれば，彼の功利主義を表現しているように思われるのである。

よく知られていることであるが，フランクリンは，十三の徳目をたててその実行の計画表をつくり，自分で採点してそれらの徳が習慣的に修得できるように心がけた。ちなみにその徳の名称および戒律は次の通りである。[30]

1. 節制（Temperance）飽きるまで食べるなかれ，酔うほど飲むなかれ。 2. 沈黙（Silence）自他に益なきことを語るな，むだ口をたたくなかれ。 3. 規律（Order）物はすべて所をきめて置き，仕事はすべて時をきめてなすべし。 4. 決断（Resolution）なすべきことをはたす決心をすべし，決心したことは必ず実行すべし。 5. 倹約（Frugality）自他に益なきことに金を使うな，すなわち浪費するなかれ。 6. 勤勉（Industry）時間を無駄にするなかれ。常に何か有用なることに従事し，無用の行為はすべて断つべし。 7. 誠実（Sincerity）偽りで人を傷つけるなかれ。無邪気に公正に考えるべし，物を言うにもそうあるべし。 8. 正義（Justice）他人に損害を与えたり，あるいは与えるべき利益を与えずして，不正を行うなかれ。 9. 中庸（Moderation）極端を避けるべし。害を受け，憤りに価すると思うとも，耐えるべし。 10. 清潔（Cleanliness）身体，衣服，住居に不潔を許すべからず。 11. 平静（Tranquility）ささいなこと，日常のこと，または避けが

たきことに心を乱すなかれ。 12. 純潔（Chastity）性交はもっぱら健康または子孫のためにのみ行ない，これにふけりて頭を鈍らせ，身体を弱らせ，あるいは自他の平和や信用を傷つけることなかれ。 13. 謙譲（Humility）イエスとソクラテスを見習うべし。

以上が有名なフランクリンの十三徳である。フランクリンは漠然と有徳の士とか人格者になることを夢想するのではなく，あたかも狩人が獲物を狙って接近するように，冷静に対象と自分との距離を測定し，周囲の状況を観察しながら一つずつ着実に「徳」を制服することに成功している。フランクリンは，「徳の完成」という目標に到達しようとすることは，不敵で困難な計画であったが，「かような試みをやらなかった場合に比べて，人間もよくなり，仕合わせにもなった。ちょうど印刷した本をまねて完全な筆法を会得しようとする者が，手本通りの希望した筆跡になることはできなくても，努力しただけ筆跡がよくなり，きれいに読み易く書ければ，まずよしとするのと同様である。」[61] と自負している。更にフランクリンは，「この物語を書いている数え年79歳の今日まで私がたえず幸福であったのは，神のみ恵みと同時にこのささやかな工夫をしてきたためであるということをわたしの子孫はよく知ってほしい。……長い間健康を保ち今なお強健な体格をもっていられるのは「節制」のおかげであり，財産もでき，いろいろな知識を得て有用な市民となり，知識人の間で多少とも名を知られるようになったのは「勤勉」と「倹約」のおかげである……」と諸徳の効用を自画自賛している。それはあきれる程幸福で楽観的な人生観の表白であるとともに，合理的なエートスによって微動だにしない程堅固に支えられていることがわかる。われわれはそこにしたたかな人生の達人の姿を見ることができるのである。ここでは合理的にシステマティックに利益を追求する「営利」の精神の方がむしろ「倫理」を圧倒しているようにすら思われるのである。しかしまたわれわれは，フランクリンが「謙譲」の徳について語る次

の言葉に接するとき，それとは別の印象を受けないわけにはいかないのである。

「わたしはこの徳の実体（the reality of this virtue）を自分のものにしたと誇ることはできないが，少なくともそのみせかけ（the appearance）をかなり自分のものにできたと思っている」[32] と。このフランクリンの言葉は，倫理の実践者としての正直で誠実な「告白」が，かれ独特の功利主義に比べて優勢であるようにすら思えるのである。すなわち，この「告白」は，表面的にはフランクリンの功利主義的な倫理観のアナロジイから，謙譲の「徳」を装う技術を身につければ処生法として十分であるから，真に謙譲であるかどうかをあえて問う必要はないという意味に解されるかもしれないが，事実はこの「徳」を会得するためにフランクリンは真剣に努力したが，結局はその徳の「影」にふれ得ただけで，そのリアリティに達することはできなかったという真実を「告白」しているのであろう。

以上のようにみてくると，フランクリンには，「徳」をインスルメンタルなものとみるということに現われている合理的で功利主義的なエートスを実は良心的で誠実な「倫理的熱情」が支えていることがわかるのである。そのひたむきな純粋さはバニヤン（John Bunyan, 1628-88）の『天路歴程』の中で天国の都をいそぐクリスチャンの一途な姿勢を連想させる程である。別言すれば，それはフランクリンの場合かれの「営利心」がすぐれて禁欲的な「倫理」とお互いにかばいあい支えあいながら複雑なエートスを形成しているといえるように思われるのである。したがってフランクリンの「人間」は，あるときは老獪きわまるヤンキートリックの見本であるかと思うと，またあるときは小児のように無邪気で純心そのもののようにみえるのである。それは互いに相反する両極端の性格をその中に抱え込みながら少しも矛盾と感じない逞しい18世紀の精神の典型であるといえるかもしれない。啓蒙主義の幅広く明るい縁側にはときとしてピューリタニズムの影がさし込まないわけではないのであるが。

一般にはフランクリンとジョナサン・エドワーズ（Jonathan Edwards, 1903–58）は18世紀の対極的な精神の代表と見なされているし，事実はそうであるに違いないが，理神論者フランクリンが，啓示的信仰をもたなかったからといって深い宗教的感情とは無縁であったとはいえないかもしれないのである。フランクリンにあっては，宗教は倫理的判断に役立たなければならず，倫理的判断は啓示によらず，理性のふるいにかけられなければならない。そうして理性は経験の裏打ちがなければならないとする。つまりある行為の善悪の決定をするのは「啓示」ではなく，あらゆる周囲の事情を考えた上で，有害であるか有益であるかの合理的判断がなされなければならないと考えるわけである。このようなフランクリンの論理が成立するコンテキストとしては，18世紀の前葉に支配的であったコズミック・トーリーイズム（Cosmic Toryism）[33]ともいうべき一種の保守的な形而上的楽観主義の精神風土とそれに対するフランクリンの批判的な心情を認めることができるかもしれない。[34] そして，すべての被造物を「存在の大連鎖」（Great Chain of Being）に位置づけ，人間もまた「動物と天使の中間にあり」と説く，時代の形而上的流行着を脱いでフランクリンが『自伝』の中で勤労によって自立的に生きる市民の倫理を繰り返し強調していることは，やはり時代を先取りしたものとしてポジティヴに評価しうると考えられるのである。

## V おわりに

以上『自伝』のいわゆる「処生訓」的な面を中心にフランクリンのエートスの性格についてみてきたのである。が，『自伝』をアメリカ的な「成功物語」としてみるならば，[35] その魅力の大部分は「多分にフィクショナルな要素が混入している」[36] と推定される前半部，特に第一部にあるといえるかもしれない。しかし「アメリカの夢」を象徴する絵図として有名なフィラデルフィアに始めてあらわれた若いフランクリンの姿を描写する記事が，フランクリンの真実の

経験であるかフィクションであるかはここで問う必要はないであろう。ともあれ，そのヴィヴィッドな「絵図」によってフランクリンのエートスのすぐれて「アメリカ」的な性格の一面を説明している，ケネス．S．リンの言葉を聞くこととする。

「チェスターフィールドのロンドンに比べれば，十八世紀のアメリカはひとつの混沌であった。船から上陸してくる移民たちであれ，アルゲニー山脈のかなたの辺境におもむこうとする冒険家たちであれ，あるいは，商業上の利益を追って沿岸地方を往き来する商人たちであれ，人々はたえず移動しつづけていたし，この地理的な動きに伴って，空前の流動性をもった社会の可動性があらわれていた。フランクリンが，その『自叙伝』のなかで，少年時代の自分自身の姿として描いてみせたあの有名な絵図，すなわち，フィラデルフィアに着いたばかりの十七歳の少年が，パン屋で買ったロールパンを一本ずつ小脇にかいこみ，三本目をかじりながらマーケット・ストリートを歩いてゆく姿は，十八世紀のアメリカ的経験の縮図である。」[37]

ケネス．S．リンはここでフランクリンと同時代人のイギリスの政治家チェスターフィールド卿（Chesterfield, Philip Dormer Stanhope, 4 th earl of, 1694–1773）がその息子に与えた「紳士としての不変の様式を守れ」という教訓とフランクリンのそれを対照させることによって，実際は上の引用文にみるように伝統的で固定したイギリスの社会に対して機会に恵まれたアメリカの社会の流動性を強調しているのである。空間的，社会的可動性というアメリカの特徴は，フランクリンのエートスのすぐれて「アメリカ」的な性格を説明するひとつの理由となるであろう。しかし，またケネス．S．リンが彼女の言葉を続けて次のようにいうとき，われわれは，フランクリンのエートスの重要な部分が見逃されるのではないかという危惧の念をおぼえるのである。

「十七世紀末にはこの流動性を助長する圧力は，マザー一家のボストンにおいてさえも，もはや抑えがたくなってしまった。天職という考えも，ろう

そく製造職人の息子であるベンジャミン・フランクリンがつぎつぎとほかの職業にうつり，ほかの役割を果たすことを押しとどめることはできなかったのである。」[33]

この危惧の念は，あるいはマックス・ウェーバーによって資本主義の精神の純粋に古典的な例としてしばしばフランクリンのエートスが引き合いに出されるときにわれわれが感じる不安の感情とも裏腹をなしているのかもしれない。フランクリンは，西欧やイギリス的レベルや，通念での「都市」も「職人」も存在しないところで職人に「至富」の道を説き，有用な市民になることをすすめているのである。

それは，プア・リチャード的18世紀のアメリカの中下層勤労者に適合する「無」から「有」を生み出すエートスであって，それはどのように精妙につくられた西欧の論理の網の目をもくぐりぬける特有の気質をもっているように考えられるのである。　(1974年5月12日)

付記—本稿は早稲田大学商学部産業経営研究センターの個人研究プロジェクトにもとづくものである。

注(1) マックス・ウェーバー著，梶山力，大塚久雄訳，『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』上巻，(岩波文庫)，p. 39.

(2) 同書，p. 139.

(3) 大塚久雄著作集，第八巻（東京，1969年10月9日）に収録。

(4) マックス・ウェーバー，前掲書，pp. 39–42.

(5) 同書，p. 42 参照。

(6) 同書，pp. 42–43.

(7) 大塚久雄著作集，第八巻，p. 109.

(8) マックス・ウェーバー，前掲書，p. 44.

(9) 大塚久雄著作集，第八巻，p. 39.

(10) マックス・ウェーバー，前掲書，p. 39 参照のこと。

(11) "Advice to a Young Tradesman," 1748 in *Benjamin Franklin's Autobiography and Selections from his Other Writings* (The Modern Library, 1944), p. 234.

(12) マックス・ウェーバー，前掲書，p. 59.

(13) 大塚久雄著作集，第六巻（東京，1969年6月30日），「国民経済」第二部「富」，p. 31.

(14) Benjamin Franklin, "Information for Removal to America, 1782" in *Benjamin Franklin's Selected Writings* (ed. by Larzer Ziff), New York, 1959, p. 259.

(15) Ibid., pp. 259–260.

(16) 西川正身著，『アメリカ文学覚え書』（東京，昭和34年9月），p. 96.

(17) パリの出版者，ビュイソン(Buisson) の手になる『回想録』の Part I, *Mémoires de le vie privée de Benjamin Franklin* (Paris, 1791).

(18) William Temple Franklin's *Memoirs of the Life and Writings of Benjamin Franklin* (3 vols., London, 1817–18).

(19) Jared Spark's *Works of Benjamin Franklin* (10 vols., Boston, 1836–40).

(20) John Bigelow's *Complete Works of Benjamin Franklin* (10 vols., New York, 1887–88)

(21) Albert Henry Smyth's *Writings of Benjamin Franklin* (10 vols., New York, 1905–7).

(22) Bruce Granger, "Benjamin Franklin" in *15 American Authors before 1900* (ed. by Robert A. Rees & Earl N. Harbert), p. 186.

(23) *Benjamin Franklin's Memoirs. Parallel Text Edition,* ed. by Max Farrand (Berkley and Los Angeles, 1949).

(24) 1. *Autobiography of Benjamin Franklin* (The World's Classics, 1924).
1. *Benjamin Franklin's Autobiography* (Everyman's Library, 1908).
1. *The Autobiography of Benjamin Franklin and Selections from his other Writings,* (The Modern Library, 1944).
1. *Benjamin Franklin's Autobiography* (1948) *and Selected Writings* (1959) (Holt Rinehart and Winston Inc.).
1. *The Autobiography of Benjamin Franklin,* with Introduction and Notes by Masami Nishikawa (Tokyo, 1947).

(25) 西川正身，「『自伝』の標準テキスト」（『アメリカ文学覚え書』（東京，昭和34年9月25日）pp. 95–108 並びに，Bruce Granger, 前掲論文を参照のこと。

(26) 大塚久雄著作集，第八巻，p. 60.

(27) 大塚久雄著作集，第八巻，p. 65.

(28) 松本慎一，西川正身訳，『フランクリン自伝』（岩波文庫），pp. 147–8.

(29) *Benjamin Franklin's Autobiography* (Everyman's Lib. 1908), p. 82.

(30) Ibid., pp. 74–5.

(31) Ibid., p. 80.

(32) Ibid., p. 82.

(33) Basil Willey, "Cosmic Toryism" in *The Eighteenth Century Background* (London, 1957), pp. 43–56.

(34) 久保芳和著,『フランクリン研究』(京都, 昭和32年2月1日), p. 50 参照。See Gerald Stourzh, *Benjamin Franklin and American Foreign Policy,* 1954, p. 7.

(35) ケネス.S.リン編, 大橋健三郎監訳,『アメリカの社会』「序論」(大橋健三郎訳, 東京, 1963), p. 2.

(36) J. A. Leo Lemay, "Benjamin Franklin" in *Major Writers of Early American Literature* (ed. by Everett Emerson, Wisconsin, 1972), pp. 205–43. Lemay は,『自伝』中のいくつかの出来事や人物またフランクリンがフィラデルフィアにやってきたくだりなどは 'artful fiction' であると主張している。

(37) 大橋健三郎訳, 同書, p. 4.

(38) 同書, p. 5.